

メレの《ソフォニズ》

関 谷 苑 子

フランス古典悲劇は、ジャン・メレの《ソフォニズ》を、その規則に従った最初の作品と見ることに、おおよそ異論のないところである。トラジ＝コメディの全盛期、《悲劇は死んだ》とアダンの言った⁽¹⁾その時代に、初めてクラシックの体裁を整えた《ソフォニズ》が出現し成功したことは、悲劇のルネサンスを告げる事件であり、その後のクラシックの悲劇の勝利への確実な布石となった。実に、1635年の《ソフォニズ》の出版以後、悲劇の書かれる数は急増し、1640年代には、30年代の約2倍、69作品というピークに達するのである⁽²⁾。それほど影響力を持っていた作品であり、既に文学史的な位置づけも明確になされているものではあるが、そのオリジナリティを今一度検討するのも無駄ではあるまい。ここでは《ソフォニズ》とその出版との比較を手掛かりとして、それを探ってみたいと思う。

I、《ソフォニズ》のあらすじ

メレの《ソフォニズ》は出版より上演が先じた。初演は1634年12月18日、マレー一座にて行われ、当時の人気俳優モンドリーが主人公マシニズの役を勤めてたいそうな成功を収めたのであった。この上演にあたっては、24時間以内という時の単一の規則を守ることに對して俳優達から苦情が出、フィエスク伯爵の援助によってようやく彼らにそれを認めさせることができたと言ふ⁽³⁾。

まず、《ソフォニズ》の筋を各幕ごとに簡単にまとめてみよう。

場所はカルタ。ヌミジア王シファックスの宮殿である。第二次カルタゴ戦争のさ中、アヌドゥリユバルの娘でカルタゴの女王ソフォニズは、対ローマ勢力を強固にする為、年老いたシファックスと政略結婚している。そして一方の東ヌミジアの若き王マシニズはローマと結び、両軍で激しい戦闘がくり展げられているところである。

第一幕：マシニズ宛に、今の境遇から救い出してくれ、敵をも愛せるくらいに辛い、とソフォニズが書いた手紙をシファックスは手に入れ、彼女の裏切りを責める。ソフォニズは手紙を書いた事実は認めながら、それは策略であると弁解する。しかし、シファックスは欺されない。かつてソフォニズはマシニズと婚約していたのであった。シファックスが戦いに出て行ったあと、ソフ

フォニスブは腹心フェニースに向かって彼女のマシニスへの愛の真実を打ち明け、その宿命を嘆く。

第二幕：ソフォニスブはマシニスを思い、不安に苛まれている。彼女は腹心達を塔にやり戦況を報告させるが、彼女達はシファックス側の不利を伝える。ソフォニスブは不吉な夢の前兆を述べ不安をつのらせている。そこへ使者カリオドールが来てシファックスの戦死を報告する。それに続いて、キルタが落ちたことも。ソフォニスブは死のうと言いが、フェニースはそれを止め、マシニスを誘惑して味方につけるのがよいと教唆する。

第三幕：マシニスが入城し、兵士達にねぎらいの言葉をかけ、さらに、ソフォニスブの策謀に遇うかもしれない、城を襲い彼女を捕えろと命令する。第二場ではソフォニスブが絶望して現われる。フェニースは、王妃の悲しむ風情が一層魅力的だ、マシニスは必ずや恋に落ちると慰め励ます。そこへマシニスが登場。彼はまず、ソフォニスブを囚われの女としてではなく王妃として扱おうと宣言する。彼女はそれに答え、彼を賞賛する。マシニスは早くもソフォニスブの美しさに打たれ、恋してしまい。彼女は彼の足元に身を投げ出し、どうかローマの手に渡さないでくれと訴える。彼は彼女と結婚する決心をし、約束の接吻を交わしてその準備のために出て行く。ソフォニスブは喜びに震えながら同時に死んだシファックスの影に怯えている。

第四幕：結婚の翌朝。ソフォニスブがマシニスに、以前から彼を恋していたこと、父親から彼の妃に定められていたことを打ち明けているところへ、シピオンの到着が伝えられる。そこでマシニスは、結婚を急いだ理由を述べる。即ちローマの反対にありの必死ゆえに、シピオンの到着以前に事が成される必要があったのだと。そして恐れるソフォニスブに対し、決してその身柄をローマに引き渡すことはない約束する。果たしてシピオンは、マシニスの行為に驚くとともに、狂気の沙汰だと激しく彼を責め、ソフォニスブを捨てた方が身の為だと迫る。しかしマシニスは拒絶する。彼に同情的なレリも、ソフォニスブは前夫を亡ぼした女だ、今にマシニスも同じ運命をたどることになる、と説得を試みるのだが、彼は聞き入れず、シピオンに取りなしでくれるようレリに頼む。

第五幕：シピオンからの返事を待っているマシニスのモノログから。彼は運命の神の犠牲者となった苦悩を述べる。そこへレリが登場し、シピオンは拒否したけれども、マシニスがソフォニスブの名誉を重んじたいと言いのなら彼女が死ぬのを止めはしない、と言ったと伝える。ソフォニスブの使者が彼女からの手紙を携えて入って来る。マシニスに約束を守ってくれと頼んでいた。彼は、その為の方法はただ彼女の死しかない、自らの手でそれを果たそうと洩らす、レリに止められる。二人が退場したあとソフォニスブが登場、夢に血まみれのシファックスが現われたと不吉な予感を語る。そこへ使者が来、残された道はただ一つ、と言うマシニスの手紙と毒薬を彼女に渡す。ソ

フォニスブは、運命を共にすると言う彼の言葉を聞いて毒薬をあおり、腹心に抱きかかえられて退場。シピオンとレリがマシニスを力づけているところへ使者が登場し、ソフォニスブの死を伝え、王妃は隣りの部屋で横たわっていると話す。マシニスはタビスリーを上げ、ソフォニスブの遺体を眼にして逆上し、ローマに対する怒りをぶちまけ、妃を返せと叫ぶ。シピオンは、彼を一人にしておいた方がよい、とレリと共に立ち去る。最後の場《ソフォニスブの亡骸を前のマシニスの嘆き》。マシニスは、最愛の妃を亡くした絶望を述べながら彼女の勇気を讃え、ローマを第二のトロヤに、と神々に呼びかけてその憎悪を訴え、そして隠し持っていた短剣で自らを刺す。

II 出典の史書及び文学書

歴史に題材を採ったソフォニスブの出典は、作者自身、その《読者諸氏へ》で挙げているように、ティティウス＝リヴィウス、ポリビウス、及びアレクサンドリアのアピアンであるが、中でもアピアンに拠るところが大きいと言う⁽⁴⁾。これらの史書の、メレが取材した部分の概要は次のようである。

シファックスはローマ側の捕虜となり、マシニスがカルタに入城して来る。宮殿の前で彼はソフォニスブと出会い、ローマの奴隷にしないでくれと哀願する彼女の美しさに打たれ、それを約束する。そしてその手段としてその日のうちに結婚する。が、その時到着したスキピオから彼女を戦利品としてローマに引き渡すよう要請され、彼女を救う手立てのないことを悟ると、彼女に毒薬を送る。ソフォニスブは、あたかも侵略者を嘲笑うかのように敢然とそれを一息に飲み干し、息絶える。

アピアンだけは、この筋に加えて、かつてアストリッュバルはソフォニスブとマシニスを婚約させていたが、カルタゴの元老院は彼らのスペイン遠征の間に、シファックスと、同盟を結ぼうとしてソフォニスブを彼の妃にしてしまったと述べている。恋愛と政治が一つになった好主題であるが、特にアピアンの書は、ヒロインの恋愛を理由づけるのに最も適切な記述を持ち、メレの採り入れるところとなった。その他、彼がアピアンから採ったと思われる点は、ソフォニスブがフェニースに向かって、その死を嘆くなど戒める所(V-5)、マシニスがソフォニスブの亡骸をシピオンとレリに見せること(V-7)である。

ソフォニスブの主題に見られる、ローマに屈服することを潔しとせず死を選ぶ誇り高い女への共鳴が、作家のインスピレーションを刺激するのは当然であろう。メレの《ソフォニスブ》までに幾度も作品が書かれているが、その主要なもので後世の作家に影響を与えたのは、ペトラルカの叙事詩《アフリカ》、トリシーノの悲劇《ソフォニスブ》(1515年)である。後者は1559年、1548年の二度にわたりフランス語に翻訳され、それに感化されて1601年、モンクレティアン

の《カルタゴの女あるいは自由》⁽⁵⁾、モンルーの《ソフォニスブ》が相次いで出ている。

以上の史書及び作品とメレの《ソフォニスブ》の影響関係について、リッチは《イタリア及びフランス悲劇におけるソフォニスブ》で詳細に述べているが、それを参考にしながら比較してみよう。

Ⅲ トリシーノ、モンクレティヤン、ペトラルカの《ソフォニスブ》

初めて上演された《ソフォニスブ》は、イタリアのトリシーノのそれであり、フランスでも有名になったのであるが、メレもそれを読んでいたと思われる⁽⁶⁾。トリシーノの作品では、やはりアピアンに則り、ソフォニスブとマシニスは婚約していたとするが、女主人公はマシニスに対し何ら愛情を抱いておらず、ただローマの囚われの女にならないが為に結婚するのである。二人の結婚後、シファックスは彼女をののしり、そしてシピオンに、あの女はマシニスをたきつけてローマを滅ぼすだろうと言う。毒を飲んだ後ソフォニスブは息子の姿を見て心乱れ、彼に心を残して死んで行く母親としての姿が描かれている。マシニスもまた、出だしは情熱的だが最後では非常に冷静である。ソフォニスブの死体を見ても、荘厳な葬式を挙げてやろうと言うのみで、彼女のあとを追うという恋に囚われた男の姿はそこにはない。

モンクレティヤンの《カルタゴの女》⁽⁷⁾においては、シファックスが既に捕われており、最初ソフォニスブは彼に同情しているが、マシニスが入城するに及んで、保身のため彼を誘惑しようと思う。マシニスは初めての出会いでたちまち恋に落ち、結婚を申し込むと、彼女はためらいも見せずに受け入れる。ここでは、先のトリシーノに見られた、アピアンに依る婚約説は採られていない。ソフォニスブは、結婚を承諾したのは軽率な行為であったと悔やんで毒を飲む。

この中の主人公の性格は、それほど共感を呼ぶものではない。ソフォニスブは狡猾な女であり、マシニスは高慢な男でありながら余りにも簡単に籠絡されてしまう。しかも、ローマの手先のように働き、シピオンから別れよと命令されると、ローマに引き渡されるのならマシニスの手で殺してくれという約束をしたと言って彼に相談するのだ。けれども、マシニスの帰りを待つソフォニスブが、乳母に向かって悪夢を見たことを話し不安をつのらせる場は注目しよう。メレはそこから着想を得ているのである。

結局、モンクレティヤンは、ソフォニスブの、祖国愛に燃えるエロイックな面を描こうとしたようである。そこにはトリシーノより、直接ティティウス＝リヴィウスに取材した跡が見られるのだ。例えば、初めて出会った二人が即座に結婚することも、思えば不自然ではあるが、ティティウス＝リヴィウスを拠り所としているからであり、その書には、ヌミジア人は情熱に走りやすい性格を具えているゆえに、と言う説明が付されてその日のうちの結婚を強調しているのである。また、結婚直

後にシピオンが到着し、二人が結婚の夜を過ごさなかったのも、ティティウス＝リヴィウスの通りである。

リッチに依れば、メレの《ソフォニスブ》がその細部で、最も負っているのはペトラルカの《アフリカ》であると言うことだ。彼が指摘している部分は、二幕二場でフェニースが、お妃の悲しむ風情は一段と美しいとお世辞を言うところ、《征服者に対するソフォニスブの演説》の出だし、五幕冒頭のマシニスのモノログ、《ソフォニスブの亡骸を前のマシニスの嘆き》、そして最後の、マシニスのローマに対する罵り⁽⁸⁾、以上である。さらに、ランカスターは、《一日でマシニスは見、愛し、結婚した》(1230行)という条り、及びソフォニスブの見る不吉な夢をペトラルカの影響としている⁽⁹⁾。

ところで、そういったディテールはともかくとして、メレの《ソフォニスブ》に最も重要に関わってくるのは、その情熱、パッションであろう。ペトラルカは女主人公を祖国愛に燃える女としてよりも、恋する女として描くことにペンを傾けているようだ。マシニスにしても同様である。愛する女を恥辱から救う為に、彼女に死ねと言わざるを得なかった男の嘆き。そして女のあとを追って死ぬ他、その苦悩から免れる道はなかるうと思う男の絶望。それらをパセティックに謳い、二人を超越的な幸福に導いているのである。

Ⅵ メレの《ソフォニスブ》の分析

メレの《ソフォニスブ》もこれに似て、政治的状況に取り囲まれた征服者と囚われの女の恋愛をクローズアップしようという意図を持っている。彼女は歴史の中の愛国者であるよりも、愛に囚われたか弱きヒロインである。リッチは、メレのヒロインの方がペトラルカのそれよりも情熱的であるとさえ言っているのだ⁽¹⁰⁾。メレは、アビアンにある二人の婚約説に拠り所を見出したようであり、ソフォニスブを《情熱のいけにえ》とすることによって恋愛の主題をまず前面に押し出している。一幕一場、シファックスに手紙を見つけられ、裏切り者と迫られる所で既に、敵の王がかつての婚約者であり、今も恋しているのだということが明らかにされている。劇の前半、マシニスの入城までは、ソフォニスブの苦悩、つまり夫シファックス及び祖国を裏切ってマシニスを受愛してしまったことの葛藤が扱われる。その言葉には、彼女が情熱の餌食、運命の犠牲者だという宿命論が含まれて来る。

私には抗うことのできない、目に見えない運命の神が、私の意に逆らって、夫に背くように仕向けるのです。この情熱、このために、私自身幾度となく驚いてしまいます。(I-3)
そして、神殿へ戦勝祈願に赴く際の二つに引き裂かれた彼女の気持を、次のようにうまく表現する。

まいりましょ、フェニース。でも、私自身の幸福のためにならぬことを祈るようなことになっ
てはいけない。神々を拜むだけ、何も願わずにおきましょ。(1-3)

そういった情熱に加えて、ソフォニスブにはさらに、夫を裏切る女の罪の意識も付与されている。
彼女が、続けて不吉な夢を見たというのが、その象徴であり⁽¹¹⁾、しかもこう言う。

あゝ、私の罪の報いとして、愛の神が私の胸にこんな不倫な炎を燃やすのだわ。(1-3)

ところが、シファックスの戦死によって、彼女には囚われることへの恐怖が新たに生まれ、それを
免れる為にマシニスの方を恋の虜にして味方につけようとする。それまで相反していた、彼女の
恋と祖国愛は、ここにおいてその利益の合致を見るのであるが、その奇妙な都合の良さにどうして
も不自然な、あるいは不器用な感が拭い切れない。ここではまだ、名誉を重んじる誇り高いソフォ
ニスブではなく、愛を獲得しようと策を凝らしながら、もしその力がなかったらどうしようかと不
安気に愛の神に助力を祈る、コケットな彼女である。この誘惑をメレは、《フェードル》における
エノヌの如く、腹心フェニースが唆すこととして、ソフォニスブの高潔さを救おうとするが、そ
の意図も、三幕四場のソフォニスブとマシニスの会見の場に至って、何ら用を成さなかったことが
わかる。

二人の会見の場は、この劇の一つのクライマックスシーンであり、作者も力を入れた箇所であろ
う。それは《マシニスの演説》、《ソフォニスブの答辞》と銘打った節で始まっている。ここから
悲劇の展開部も始まるのであるが、しかし、この見せ場は、クラシックの悲劇として成功している
と言えない部分である。よく引き合いに出されるように、腹心が

コリスベ、彼はこちらのものよ。(811行)

それから

まあ何と、彼の心はどんどん愛の罠に落ち込んで行くわ！(887行)

と合い間に口を狭む喜劇的調子や、接吻を交わすという行為もその理由ではあるが、それ以上に問
題にしたいのは、その場全体が悲劇の枠からはみだしてしまっているということだ。舞台の奥深い
所から聞こえていた管の通奏底音が、ここでぶつり途絶えるのである。ソフォニスブは既に、恋
人を手に入れた幸福な女であり、マシニスもた易く罠に落ちて、それは愛の二重唱に変わっている。

しかし、この場をシェレルは、作劇法として重要だと高く評価している⁽¹²⁾。メレの《ソフォニス
ブ》以前には、このように二人の人物が一つの問題で対話し、一つの予期せぬ結果を産み出すこと
になる場面はなかった、と言うのである。確かに、劇の作り方として、かつての延々と続くディス
クールやラマンタシオンに比べて新鮮であり、劇的盛り上がり運んで行くから、その点では評価
され得よう。けれども、そこで述べられる内容が、そしてそれがもたらす予期せぬ結果が、この場

においては、トラジ＝コメディあるいはパストラルの域を出ていないのである。逆にリッチは批判的で、《悲劇的な外見に隠れているのは結局喜劇のもう一つの間である》と言い、《ソフォニスブという非常に悲劇的な役をメレはほとんど喜劇のそれに変えてしまった》と書いている¹³⁾。

この、約百行のうちにマシニスの心は、ソフォニスブに対する敬意に始まってその後、賞賛、同情を経て愛に変化し、遂には結婚を約束するまでに至るのだが、それを勝ち取る為のソフォニスブの手筈は、まず彼を賞めて自分の弱い立場及び下心のないことを強調し、さらに、好意を寄せ始めた彼に、自分にはそんなに魅力はない、からかわないでくれ、と言う、つまり逆説的な口説き文句である。

シファックスに先立たれた妻は余りにも不幸せゆえ、マシニスと再婚するなどできません。我々はこのせりふを裏から読めばよいのである。何も知らぬはマシニスばかり、と、観客は彼の人の好さとソフォニスブのCKETTリーに心を縋られるに違いない。

実際、こういう場があってこそ、メレの《ソフォニスブ》は当時成功したのだろう。サン＝テヴルモンがその成功の理由を《貴婦人の好み及び宮廷人のまことの知性に適った為》としているという如くである。当時の観客は未だ古典悲劇を知らなかった。その嗜好はトラジ＝コメディやパストラルにとどまっていた筈であるから、新しい手法に対してよりも、彼らのよく慣れた場面にまず最初、安心して拍手を送ったことを思われるのだ。

哀れな女の風情やその涙が権力者の心を征服する。この公式は、例えば《アンドロマック》におけるアンドロマックとピリュス、《ブリタニキウス》のジュニーとネロンに見られる関係だが、それら完成されたと見られる悲劇には、必ず最後まで悲劇的雰囲気というものが漂い続け、一つの不幸あるいは破滅に向かって進んでいることが常に明確にされている。途中、多少の希望がほの見えることがあっても、それが成就したり、またその雰囲気が舞台全体を支配することはない。悲劇的結末が着々と準備されるのだ。ところが《ソフォニスブ》のこの三幕四場は、女主人公のかつての苦悩が歓喜に変わる、まさにトラジ＝コメディの結末である。確かに、ソフォニスブは最後で不安を見せはする。

私の心は完璧な喜びを味わえない。まだシファックスの葬儀も済まぬのに、私は二度目の婚礼のたいまつを灯すのです。

と。しかし、それも、《私達の自由のため》に必要な結婚なのだと合理化の言葉が与えられることによって、かえって我々は、彼女の喜びを感じとるのである。どうしても、悲劇全体の構成から見て、この場は浮き上がって見える。ともあれソフォニスブは、マシニスの愛を得、同時に国を取り戻したのだ。ここにおいて一つの筋が一応の終結を見たと思うのは間違いだろうか。

悲劇は第四幕から始まる。主人公二人がお互いの愛を確かめ幸福に浸っているその時、シピオンが到着し、そこでまさしく危機が提示される。以後、劇の中心人物はマシニスとなり、彼の苦悩と闘いが舞台上でくり展げられる。

彼が闘う相手はシピオンである。彼は主人公の情熱を禁じる苛酷なローマを表わす役割を受け持っているが、この人物の描き方は、それを十分果たしていないようである。彼の皮肉っぽい言いまわしはしばしば取り上げられるのだが、彼は開口一番こう言う。

これはこれは、親愛なるマシニスよ、天が下、貴殿のように幸福な王が居ようか。何たることノ一日のうちに国を取り戻し婚礼を挙げるとはな。(Ⅳ-3)

この調子はモンクレティアンのレリに似ている。彼のレリはこう言うのである。

これはこれは親愛なる友よ、この幸福な一日を見れば、戦争もほとんど終わってしまったようであるな。(Ⅲ)

マシニスがソフォニスブに死なせてやると約束したことをシピオンが知っていて、彼女が死ぬのを止めはしない、と言うのも、モンクレティアンと同じだが、その他の出典では、シピオンは飽くまでソフォニスブの引渡しを命じ、そこでマシニスは彼女に毒を送るしか道がないと決心する。彼女の名誉という見地から見れば、メレのシピオンは、その冷酷さの度合が減少しているようでもある。

シピオンに関し、リッチは《時には不快になるその皮肉な調子、卑俗性及び絶望的な欠陥を持ち合わせた、傲慢なブルジョワだ》とかなり手厳しい。それ程ではなくとも、主人公の前に立ちはだかって彼らを、その抵抗も空しく破滅に追いやる強大な力の象徴としては、いささか小者の印象を与えるのは確かであり、恐ろしいローマの鷲の影が舞台をよ切ることもないようである。従って、マシニスの抵抗も、そしてその苦悩も、我々には物足りなく思え、彼がローマの奴隷に見えてしまうのだ。

四幕以後のソフォニスブも、名誉心より愛の方が多く付与されており、彼女が囚われの恥ずかしめを受けたくない、それよりも殺してくれ、と訴える時にも、我々には彼女のマシニスへの愛しか見えない。彼女の不安な心理は、明け方に見たという不吉な夢で表現され、自分の死を予感する。

また今日も夜明けに、恐ろしい夢で目が覚めました。不運なシファックスが血まみれで現れ、私にこう辛い言葉を浴びせるのです。裏切り者め、俺は永遠の闇から戻って来た。お前の今後の不幸をゆるぎないものにする為にな。侮辱された夫の当然の怒りが、お前に地獄へ来いと求めている。お前の罪がお前をそこへ呼び寄せるのだ……(Ⅴ-4)

モンクレティアンでは、こうなっている。

さようなら、愛する乳母や、私は、頭の上にかずちが間もなく落ちる夢を見たのです。(Ⅴ)

同じく身の破滅の予感ではあるが、メレのでは、一幕にも見られた如く、女主人公が自己の情熱にはっきりと罪の意識を抱いていて、彼女の情熱こそが不幸を招いたという自覚のあることが理解される。

遂に、マシニスから送られた毒を深く飲むソフォニスの行為は、まことにエロイックである。そのエロイズムにこそ人々は感動して来た。ローマの奴隷になるよりは、と自殺して果てる高邁な誇り高い精神。それは同情を引くよりも、むしろ人々の勇気を鼓舞するものである。そんなソフォニスの死であるが、メレの《ソフォニス》における彼女の死は、約束された死、幸福な死となるのである。それは、キリスト教的であるというつもりはないが、それでもやはり、この世での結婚を無意味と見なして超越的な愛を求めた、ペトラルカの《アフリカ》の影響だと思われる。ソフォニスはマシニスが彼女のあとを追うと知って、毒をあおるのだ。

私のマシニスがあとに続くと言ってくれたのだから、死ぬことも、私にとっては生きることと同じほど心地よいものです。(V-5)

悲劇的な死ではあるが、そこには祖国に殉じるというエロイズムへの感動よりも、情熱に導かれるままに至った情死の甘美さが残るのである。

それに比べれば、マシニスの最期の方が悲劇的である。彼は自分の手でその情熱を断罪しなければならず、そしてその結果を眼にして絶望の内に自殺する。彼も運命の犠牲者として在る。ソフォニスを捨てると命じるシビオンを、

俺の幸運な出会いを彼が遺憾に思っているのだとノ元はと言えば彼が引き合わせたことではないか。(IV-4)

と言って恨むのだ。故に、その最期はローマに対する、運命に対する呪いとなり、パテティックな叫びにならざるを得ない⁽¹⁵⁾。そして最後の

情容赦のないローマ人の苛酷さであっても、それが恋する者の身にどんな事が出来ようと、愛に対してはなす術もないことを示してやるのだ。

という言葉の中に、この悲劇の主題、即ち、愛の虜となり、それを守る為に闘い、しかし死によってしか果たす道がなかった、愛に誠実の男の、愛に殉じる姿に集約されるのである。

マシニスを最後に自殺させたことは、この劇が恋愛を主題にした悲劇である限りにおいて、成功した点であると言えよう。二人の主人公の死という設定は、作者自身、《読者諸氏へ》の中で、それが観客に感動を与える筈だと自信を持って述べている通り、トリシーノやモンクレティアンの作品よりも遙かに深く共感を呼ぶものである。

V 《真実らしさ》に関して

マシニスの自殺、それは史実ではない。またシファックスの戦死も同様だ。その変改の理由としてメレは、《詩人の仕事は、実際に起こったことを描くのではなく、起こり得ること即ち蓋然、もしくは必然的に可能なことを描くことである》⁽¹⁶⁾というアリストテレスの言を引用している。verissimile——真実らしさ。それをメレは第一に置いた。シャプランが真実らしさは《詩にとって不易の目的である》⁽¹⁷⁾と言い、ドービニャックが《それこそあらゆる戯曲の基礎となる。(中略)要するに真実らしさは言わば劇詩の本質であり、それなくしては舞台上の合理的行為、言語は不可能である》⁽¹⁸⁾と宣言し、さらにはラシーヌも《悲劇において感動させるのは真実らしさしかない》⁽¹⁹⁾と言った。古典悲劇の最も重要な美学を、メレは、最初のクラシックの悲劇において明確に打ち出していた。しかも、その創作が《ソフォニスブ》に効果的に作用したのは確かであった。

もう一つの変改、シファックスの戦死の効果はどうであろうか。マシニスは求婚の際、シファックスは死んだのだから正式な結婚が出来ると言う。それは二人の結婚を正当化する手段となり、ヒロインは重婚の罪から救われている。そして彼自身、一幕に見る所では確かに嫉妬深く帝王然としない哀れな老人であるけれども、捕えられて生き恥をさらさないで済むのである。それは、《礼節》への配慮と見なされる。

このように《真実らしさ》に鑑みて史実は変改されている訳だが、ところで、主人公二人が初めて出会ったその日のうちに結婚に至ると言う、まさしく史実であることが、《ソフォニスブ》では《真実らしく》なく思えるのは何とも皮肉ではないか。たとえ、シピオンの到着前に既成事実を作っておかねばならなかったという理由づけがマシニスの言葉によってされていても⁽²⁰⁾、それが恋愛の成せる《過ち》であったと言うだけでは、観客には釈然としないものが残るであろう。誇り高い女王が、国を失った直後に、愛する敵国の王と易々と結婚し、彼女の恋愛を成就させるのであるから……女主人公の祖国愛と恋愛という異質の要素を曖昧に合体させてしまっている為に、彼女の行為、さらには劇全体の一貫性及び必然性において弱さが露呈される結果となっているのだ。

IV コルネイユの《ソフォニスブ》

主人公の祖国愛と恋愛——前者を強調して彼女を熱狂的な愛国者にしたのは、この約30年後、1663年に上演されたコルネイユの《ソフォニスブ》であった。同じクラシックの作家であるからには、それに少し触れる必要がある。それは、根っからの政治的人間が変わっている。

コルネイユのソフォニスブにとって、愛は政治の道具である。ローマの軍門に降ろうとするシファックスを、自分を愛しているなら祖国を見殺しにできない筈、と叱咤し、彼が捕われた後にマシ

ニスと結婚するのも、彼を愛しているからではなく、国を守る為そしてローマから彼を祖国に取り戻す為である。また、鎖につながれたシファックスが彼女の裏切りを責めると彼女は、ローマの手から私を救ってくれるのなら私はあなたのものだ、マシニスへの愛情はどのようにでもなる、と言いつつ。彼女の名誉こそがその《情熱の主人》なのである^[21]。マシニスから送られた毒薬を彼女は、それは彼にこそ必要なもの、と言って送り返し、彼のローマへの隷属を非難する。そして遂には、私の不名誉を招いたのは二人の王が卑怯だったからだ、彼らを罰するためにカルタゴの為に死ぬ、と言う言葉を残して自殺するのである。

コルネイユは《読者諸氏へ》^[22]で、まずメレの模倣を避けるべきと考えて主題の取り方を改めたと述べている。その結果は、ソフォニズを祖国愛の権化にし、ともかく別のものを作ろうとする余り、他の出典にも見られるディテール、例えば、二人の出会いの場やソフォニズが毒薬を受け取って飲む場面、彼女の死後にマシニスが嘆く場面など、劇的盛り上がりには有効な箇所までも、メレが使ったと言う理由によって削除されてしまっているのである。

従って、二人の王の死と言う創作を彼が採る訳もない。そうしなかった理由を、彼自身、ティティウス＝リヴィウスを重んじるからで、また、トリシーノやモンクレティヤンも彼らを死なせていないではないか、と言う。しかし《真実》を先行させる彼とて、捕われたシファックスをして妻に相談させたり、ソフォニズの飲む毒薬が自分のものであったり、また、エリクスという王女を登場させて、彼女とマシニスの結婚を暗示する結末としたり、変改を行っているのだが、そのどれもが、成功したとは思えない。ただ、エリクスの存在、マシニスを愛しており、その上、ローマ側でもマシニスと結婚させようと企てている彼女の存在が、ソフォニズに結婚を急がせ、同時にローマの方にも彼らの結婚に反対する理由を与えているのは認められる。また、マシニスを、奪われた恋人を取り戻しに来る男として登場させていることも、先に挙げたエリクスの存在と共に、劇の行為の理由づけとなって論理的な展開を見せる要因となっている。

ともかく、コルネイユの《ソフォニズ》が、ドービニャックの《演劇実践論》を念頭に置き、メレの作品に対抗する形で書かれたのは明らかだ。彼は、アリストテレスやホラチウスの《規則》では、人物を美化し過ぎ、歴史を歪曲するので敢えて避けたと述べているのである。ところが、コルネイユかメレか、どちらの《ソフォニズ》が悲劇として成功し人々に感動を与えるかと言えば、メレの作品であることは、ヴォルテール初め大勢の認めるところであり、しかもそのヴォルテールの《ソフォニズ》でさえ、メレのものには及ばないのである。

VII メレの悲劇の理念

メレは、1631年の《シルヴァニール》の序文において彼の演劇論を披歴しており、その中で、喜劇と対比させながら悲劇について語っている。その主な部分を挙げてみよう⁽²³⁾。

《悲劇は人間性の鏡のようなものである。当初かくも輝かしく勝ち誇っていたまさにその帝王、その君主が、最後には運命の異常を悲惨にも証明することになるのである》、《悲劇の主題は周知の主題でなければならない。従って、歴史に根拠を持ち、さらには時に伝説的な事柄を交錯させることも出来得るような主題である》、《悲劇は高尚な人物の行為と情熱を高尚な文体で描くものである》、《悲劇は初め輝かしく、偉大な人物の壮麗さを示す。が、最後は悲惨に、絶望に陥った帝王や君主を見せる》。

この、彼自身の悲劇の理念を実際に作品化する最初の試みが《ソフォニスブ》であった訳だが、その定義の限りにおいて、成功していることは認めねばなるまい。アリストテレス的な人物、即ち、ラシーヌが《アンドロマック》のピリュスに関して述べた如く、《人並以上に善くあり、そして正しくあると言う人ではないが、罪や悪を犯してでなく、単に、ある過失、誤解から不幸に陥る》⁽²⁴⁾人物を悲劇の主人公に持ち、全篇を通じて彼を葛藤させ、結末ではその過失に値する罰を科し、しかも、その過失を嫌悪すべきものとしてでなく同情すべきものとして描こうとした方法、あるいは少くとも作者の意図。劇のそういう展開法こそが、三単一の規則の遵守もさることながら、それにも増してこの場合、重要な意義を持つのであり、その点においてクラシック最初の悲劇としての《ソフォニスブ》を評価したいと思う。

< 注 >

- (1) A.Adam, Histoire de la littérature française au XVII^e siècle, Tome I, del Duca, p. 424.
- (2) J.Schérer, La dramaturgie classique en France, Nizet, pp. 443-459.
- (2) G.Bizos, Etude sur la vie et les OEuvres de Jean Mairet, Slatkine Reprints, p.176.
- (4) J.Mairet, La Sophonisbe, Nizet. p. 8.
- (5) 1596年の《Sophonisbe》を書き改めた。
- (6) C.Ricci, Sophonisbe dans la tragédie classique italienne et française.Slatkine Reprints, p. 90.
- (7) Montchrétien, La Carthaginoise ou la liberté, Plon 1891.
- (8) C.Ricci, Sophonisbe dans la tragédie classique italienne et française, Slatkine, p. 90.

- (9) Lancaster, History of French dramatic literature, Part II, Vol. I, p. 702
- (10) C. Ricci, Sophonisbe dans la tragédie classique italienne et française, Slatkine, p. 91.
- (11) v. 309.
- (12) Théâtre du XVII^e siècle, Tome I, Bibl. de la Pléiade, p. 1286.
- (13) C. Ricci, Sophonisbe dans la tragédie classique italienne et française, Slatkine, p. 93.
- (14) Ibid., pp. 95-96.
- (15) Sophonisbe の存在がローマに与えた恐怖について、彼女を賞める箇所は、Petrarca では Sophonisbe 自身の言葉である。
- (16) 松浦嘉一訳。この訳の「蓋然」に当たる原語は verissimile である。
- (17) Préface de l'Adone de Marin.
- (18) Livre II, Ch. II, p. 76.
- (19) Préface de Bérénice.
- (20) 四幕一場
- (21) Corneille, Sophonisbe, OEuvres Complètes, Intégrales, p. 660.
- (22) Ibid., pp. 642-644.
- (23) J. Mairet, Sylvanire, Théâtre du XVII^e siècle, Tome I, Bibliothèque de la Pléiade, p. 482.
- (24) Préface d'Andromaque.